

新しく入った子どもの本



絵本・読み物 『みんなわたしの』『魔女ひとり』『よるくま クリスマスのまえのよる』『リサとガスパールのクリスマス』『クリスマスってなあに』『あのね サンタの国ではね…』

『チャレンジミッケ! 4 サンタクロース』『チャレンジミッケ! 5 むかしむかし』『パパといっしょに』『黒グルミのからのなかに』『きつねのホイティ』『こんどまたものがたり』『カイサとおばあちゃん』『ポータブル・ゴースト』『トンデモネズミ』

おかあさん・おとうさんに※

『名作に描かれたクリスマス』(若林ひとみ)『わらべうた 正統』(谷川俊太郎)『とんぼの目玉』(長谷川摂子)『子どもは本でできている—我が家の読書記録』(手島一恵)『おはなし会プログラム』(「この本読んで」編集部)『先生と司書が選んだ調べるための本』(少年写真新聞社)『競争しても学力行き止まり』『格差をなくせば子どもの学力は伸びる』(福田誠治)

※書架のどこにあるかは、係りにおたずねください。

文庫あれこれ◆頑張って新刊40冊以上入れました。年末年始お忙しいですが、読書の時間もお持ちください。◆文庫の有志が集まってクリスマスツリーを飾ってくれました。本の整理も、助かります。◆フィンランドの教育とわが国の教育施策のちがいを考える機会がありました。まったく同感したわけではないのですが、そのときの講師の本を買いました(上記福田誠治さん)。子育て中のおとうさん、おかあさん読んでみてください。◆どうも最近、話したことや約束したことを、右から左に忘れてしまうことが多くなりました。91歳の母を叱れません。◆本が増えて書架がいっぱいです。ときには、棚ごしらえを新鮮に、模様替えもしてみたいと思うのですが、なかなか。来年も何かと忙しくなりそうです。おまけに、右下肢に痛みを覚えて何と不自由なこと。みなさんはお元気ですが、おたがいが、年齢と相談しつつ暮らすことが大切ですね。◆今年も文庫をご活用くださり、ありがとうございました。枯木立の間から、光り輝く海と大島が見えます。何とか、来る年を明るいのにしたいですね。よいお年を! (西村)

“ “これからの催し物のお知らせ” ”

春よこい・スペシャル

子ども おとなも おはなし会

日時 3月22日(日)午前10:30~11:30

おはなしのベテランおばあちゃんおふたり来館

平塚ミヨさん・古市静子さん

楽しいおはなしとたくさんの手遊びを

やっつけていただきます。

おとなの方もぜひ、童心にかえて

聴きにいらしてください。

★伊豆高原・わらべ絵館開館5周年記念のイベントとして、3月21日(土)午後6:00から、おはなしとフルートの夕べがあります。(詳細は、直接、わらべ絵館にお尋ねください。)語り手は、上記・平塚さん、古市さん、西村です。フルートは伊豆高原在住のお父さん方だそうです。何だかたのしそうですね!

☆☆2009 年前半の開館スケジュール☆☆

- ◆1月は通常の第3土日(17、18日)です。
 - ◆2月は変則第4土日(21、22日)です。
 - ◆3月も変則第4土日(21、22日)です。
 - ◆4月は通常の第3土日(18、19日)です。
 - ◆5月はアートフェスティバル参加の関係で、10日~17日まで開館。開館時間は午前10時~午後3時です。
- ※文庫の時間：通常、土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時
 ※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。
 午前10:30~11:00
 ♥文庫開館日は通常、毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。

沙羅の樹文庫便り

No.28

(2008年12月号)



(ポプラ社)

今回、文庫に来る前に、大人のためのおはなし会で、「だれが鐘をならしたか」というおはなしを語ってきました。イエスさまのお誕生祝いに一番値打ちのある贈り物が祭壇におかれた瞬間に、教会の塔の鐘が自然に鳴り出すという言い伝えがあり、金持ちや王様までも競って立派な品を贈るのですが、鐘を鳴らすことができたのは、貧しい幼い兄弟の真心だった、という話です。『クリスマス物語集』(借成社)には、心あたたまるお話がたくさん載っています。また『名作に描かれたクリスマス』(岩波書店)は、様々な作品の中のなつかしいクリスマス場面を思い出させてくれます。

クリスマスの本コーナーを設けました!

新しいクリスマス絵本もありますよ。たまには、家族でどっぴりクリスマスにつかってみませんか!

♥Have a nice Christmas and a happy New Year! ♥

『大誘拐』(天藤真著 双葉社)

「ねえ、この本、読んでみませんか?」と、ある夕方友人に声をかけられたのが最初の出会い。友の手元をみると、随分と分厚いし地味な装丁の文庫本である。正直に言って食指は動かなかったけれど、読書家で知られた人が薦めてくれるのだからと素直に(?)借りて帰った。帰宅して早速のぞいてみたら、まあなんて面白い!! 忽ちのうちに、この本のとりこになってしまった。

留置場に入った経験のある若者が、三人組を結成し誘拐を計画するというストーリーなのだが、なんと大成功をしてしまうのである。三人はこの誘拐を最後の仕事と決めて綿密な計画をたて目標を5000万円に設定するが、誘拐された富豪の老女は、自分をそんな、はした金で取引することはならないと一喝する。それからの大富豪トシ刀自の活躍ぶりの爽やかなこと、天下一品なのだ。

超小柄で体重は30キロ台。足腰の達者な85歳は、世界情勢をちゃんと見据え、苦労知らずの我が息子どもを、自分がこの世を去る前に鍛えなおす。誘拐されたことを上手に利用し、どんどんとことを運ぶさまは、小気味よいし。その頭の切れのよさに、鈍磨のわたしは感心しっぱなしであった。

この超小柄の、超富豪の老女は誘拐犯の首領として采配を存分に振るい若者たちにもそれぞれに生きる目的を与えてしまう。

ハラハラしながら、しかも楽しく読み進み、読み終わった後のあの満足感!! もし、あなたが今パットしない気分なら、すぐにこの本を手になさませ。きっと元気をもらえますよ。

本を手渡してくれた友人に感謝し、やたらに「面白かった! 面白かった!!」と触れ回っているわたしです。(丸岡和代)

◎遠隔会員からの寄稿です。当然、文庫にいれました!

読みました。ちょっと現実離れしているかなとも思いますが、実に豪快・爽快でした。

『名画の言い分』(木村泰司著 集英社、2007)

本の帯に書かれている言葉「へえ、そうだったのか」は、まさに、この本の内容と読後感とを的確に表しています。

西洋美術史などと言うと、なかなか取っつきにくく、絵は、自分の感性で好き勝手に見てきましたが、著者は人間の感性などあてにならない、とりわけ、中世までの絵は、歴史、政治、宗教観などあらゆる社会背景の知識が必要であり、理性的に見なければならぬと述べています。

古代ギリシャから近世に至るまで、その時代背景から、一枚の絵が当時の人々に伝えようとしたメッセージを、著者は読者に説明しています。見たことがあっても記憶にはっきり残っていない絵も、まさに、そうだったのかと納得します。

2400年間にも及ぶ美術史には、ついていけない感もありますが、この秋に上映された「ブーリン家の姉妹」という映画に出てくるヘンリー8世の肖像画から、プロテスタント英国教会の創設された経緯に及ぶと、思わず「そうだったのネ」と、ひとり言が口をついて出てきました。

この本によって、西洋美術を見る楽しみと面白さを味わう深みに、一歩近づけた気がします。

巻末に、西洋美術史を日本にいながら学ぶのに、大塚国際美術館が紹介されています。(福岡恵)

◎著者はまだ40代前半のアメリカで活躍中の新進気鋭の西洋美術史家。絵の鑑賞は人それぞれ自由なのでしょうが、画家の意図、その時代・社会背景を知ってその

絵の深淵にせまる、というのもぞくぞくしますね!

みな

新入庫本

大人の本

『小学五年生』(重松清著 文藝春秋) 『草すべり 其他の短篇』(南木佳土著 文藝春秋) 『悼む人』(天童荒太著 文藝春秋) 『女房逃ゲレバ猫マデモ』(喜多條忠著 幻戯書房) 『未見坂』(堀江敏幸著 新潮社) 『吾妹子哀し』(青山光二著 新潮社) 『天使の歩廊—ある建築家をめぐる物語』(中村弦著 新潮社) 『転身』(蜂飼耳著 集英社) 『ふしぎな図書館』(村上春樹著 佐々木マキ絵 講談社) 『彫残二人』(植松三十里著 中央公論新社) 『日本浄土』(藤原新也著 東京書籍) 『星と祭 上下』(井上靖著 角川文庫) 『大誘拐』(天藤真著 創元水路文庫) 『建築家安藤忠雄』(安藤忠雄著 新潮社) 『図説古事記 ふくろうの本』(石井正巳著 河出書房新社) 『詩と詩をむすぶもの—詩人と医師の往復書簡』(谷川俊太郎・徳永進共著 朝日新書) 『『ひとりの老後』はこわくない』(松原惇子著 海竜社) 『読書は1冊のノートにまとめなさい』(奥野宣之著 ナナ・コーポレート・コミュニケーションズ) 『図書館・アーカイブズとは何か』(藤原書店「別冊 環15」)

『源氏物語 1~8・附登場人物系図』(上野榮子訳 日本経済新聞出版社) 『わが心の源氏物語—撰閲時代の仏教』(三浦克子著 揺籃社)

『世界の測量 ガウスとフンボルトの物語』(ダニエル・ケールマン著 瀬川裕司訳 三修社) 『しずかに流れるみどりの川』(ユベリ・マンガレリ著 田久保麻里訳 白水社) 『せめて一時間だけでも—ホロコーストからの生還』(ペーター・シュナイダー著 八木輝明訳 慶應義塾大学出版会) 『血液と石鱗』(リン・ディン著 柴田元幸訳 早川書房) 『本泥棒』(マークス・ズーサク著 入江真佐子訳 早川書房)

今年もたくさんの本が増えました!

児童書は、3700冊余(開館時2000冊)、一般書は文庫を含めると、1800冊以上(開館時のおよそ4倍)です。一生懸命購入もしましたが、たくさんの方々からもご寄贈いただきました。有難うございます。また、400冊以上も、子どもの本を贈ってくださった東京・広瀬さんに特にお礼申し上げます。